

# 東京スタイル恋愛ストーリー 季節はずれの恋心

文：夏目 かをる 撮影：熊切 大輔 デザイン：Ogata8  
ヘアメイク：村上 まじか スタイリスト：笠本 糸り子  
撮影協力：エノテーカーイ プリミ 品川店 (TEL. 03-5461-1321)  
衣装協力：穴戸/アンディノリ ウォモ (TEL. 03-3477-1415)  
奥田/マリナ リナルディ (TEL. 03-3478-5475)、アルファ タジマ (TEL. 03-5704-0315)  
rev K shop (TEL. 03-3407-0131)、NINA RICCI /マルショウ エンドウ (TEL. 03-5820-3595)



ホテルの最上階にある50メートルのプールは、ガラス張りの窓から差し込む光に包まれていた。

水面がきらきら輝いている。まぶしさと恥ずかしさで、菊池真由子は目を細めた。杉田隆之がスタートライン近くのプールサイドで手を振っている。40歳をとうに過ぎてはいるのに、隆之の肉体は見事だ。鍛えられた筋肉が隆々とみなぎっている。

「ずるい…」  
と真由子は呟いた。  
地位も名誉も財産も、しかもステディな女性もいるのに、それでも真由子をどん欲に求める隆之に、真由子は戸惑いすら覚える。

水しぶきがプールサイドからあがった。  
隣のコースで泳いでいた女性が、勢いよく飛び跳ねてプールサイドに上がる。それを合図に、真由子は深く潜って泳いだ。隆之の視線を逃れるように。

昨夜愛し合った後で、まだろんでいた隆之の肩に頭を乗せながら、真由子は思い切っって聞いてみた。

「どうして私みたいな堅物の院生とつきあっているの？ 素敵なステディがいるのに」

隆之は、少し笑った。  
「私をからかっているの？」

隆之は目を開けて「違うよ」と、真由子を抱きしめた。

「真由子は最高だよ。だから一緒にいたいんだ」

「一緒にいたいのは、私だけじゃないでしょ」

「今夜の真由子は怖いなあ」

隆之は起きあがってバスローブを身にまとい、テールに近づいた。ポトルに少し残っていた赤ワインをグラスに注いで、一口含んだ。

「時間が経つても、うまい赤だな」

隆之はまるで答えを探す時間を楽しむように、ゆつくりと飲む。

30代で独立して、複数の会社を経営しながら、企業のコンサルも兼ねている。中年実業家の貫禄があってもいいのに、短く刈り上げたベリーショートが若々しい。加えて、週に2回、ハードトレーニングをこなす努力の賜物が、筋肉質の腕となつて、情熱的に真由子を抱く。一点

の曇りもないほど自信に溢れている彼に「どうして私なの？」は愚問だと知りながら、敢えてぶつけてみたくなった。

真由子もバスローブをまとい、隆之の隣に座って、もう一つのグラスにある残りのワインを飲み干した。

「なぜ？」

隆之の顔を覗く。本当は不安でいっぱいのはずなのに、今の真由子には不思議と力がみなぎっていた。隆之の答え次第では、別れを切り出してもいい。特定のステディがいる男との関係を続けるか、別れるかの決定権は、自分にあるのだ。

「つきあつてどのくらいだった？」

隆之がゆつくりとした口調で聞く。

「明日で、半年よ」

真由子は隆之との初めてのデートを思い出した。青山にある隠れ家レストランで、花束をプレゼントされた。白い花びらの可憐な花の美しさに打たれ、ネット上で調べたら、ウインター・コスモスという名前だった。名前の由来を知りたくなって、大学の近くの花屋に立ち寄った。

「コスモスの季節が終わってから咲くので、ウインター・コスモスと呼ばれています。花が少なくなつた晩秋に咲きますから、季節外れの花と呼ばれることもあります。やさしくて可愛らしい印象のわりには、ワイルドで強いですよ」

店員の説明を聞きながら、「季節外れの花」という言葉に強く惹かれた。  
ステディな彼女の存在を打ち明けた隆之に、いらだちを感じながら、彼を好きになつてしまった恋心を持て余していた。恋は理屈なんかじゃない。徹底的に調べて分析して答えを導いていく研究の世界とは、まさに真逆だった。「好き」と無邪気に甘えなくなる恋心と、振り回されたくないという二つの相反する気持ちの間を、まるでメトロノームのように揺れ動いていく。自由に恋愛を謳歌する隆之との恋は、同世代の女性達の恋と比べて、別世界の出来事のようにだ。ステディのいる中年男性との恋は、真由子にとって、まさに「季節外れ」「シーズンオフ」だった。

隆之はそんな真由子の気持ちなど知らずに、恋について語る。「そうか。ところで男と女はなぜつきあうんだろう。真由子はどう思う？」

隆之の問いに、真由子はわざと即物的な答えをぶつけてみる。「理由は色々。恋愛という妄想にとらわれた病気。あるいは性欲、お金、または利害関係」

隆之はふつと笑って、真由子の頭を撫でた。

「ロマンチックじゃないね」

「隆之さんはどうなの？」

「生まれも育ちも異なる男と女が出逢つて、愛し合う。それぞれの世界の情報を伝え、共有したい、時には学ぶ。そうやって、お互いに成長していくんだ」

「すごいわ。論文が書けそうね」

真由子は薄く笑った。自分の気持ちも知らずに、隆之は理想の恋を語っている。ついていけないと思つた。

ふいに隆之が真由子の腕をつかみ、唇をふさいだ。黙っている、という男の圧力だった。

情熱的なキスが、やがて情熱的な官能へと導いていった。敵わないと思つた途端に、再び強く抱かれたままベッドへと運ばれていった。

「明日で、半年よ」

外堀周辺では、春の気配が色濃く漂っていた。

アメリカ西海岸料理のデイナーを楽しもうと隆之に誘われて、真由子は夜の外堀を散歩しながら、指定のレストランに入った。フロントで、隆之が少し遅れると告げられた真由子は、予約席に通される。

パープルとイエロー、そしてブラックという大胆な色調のインテリアは、重厚さをたたえていた。ゴージャスな店内に気後れしたが、白いテーブルクロスの間にある小さな星形の愛らしいキャンドルを発見すると、自然に笑みがこぼれた。

席に座り、バッグから携帯を取り出す。イギリス人のリチャードからメールが届いていた。GWにロンドンに遊びに来ないかという誘いだっただけ。

リチャードは長身で金髪の26歳。昨年MBAを取得したビジネススマンで、誠実な男性だ。修士課程の卒業論文に、真由子は大いに刺激された。研究の相談も親切に応じてくれる。研究員を目指す真由子にとって、理想の男性といつてもいい。リチャードの誘いに、真由子は、ほおつと

ため息をついた。イギリス経済学を専攻している真由子にとって、渡英はぜひ必要だった。でもロンドンでリチャードと一緒に過ごすというのは、ボーイフレンドから一歩進んだ深い関係になる。もちろん、拒否することもできるが、再会したら、きつと魅力的なりチャードと愛しあうようになるだろう。それは別の言い方をすると、隆之との関係が終わりになることだ。

真由子は古風なところがあって、特定の恋人は一人がいいと思っている。特定のステディがいる隆之を、恋人と呼べるのかどうか。いつも真由子は迷うのだが、でも隆之に誘われると会いたくなる。「これが私の恋なのかしら」。真由子は再び深いため息をついた。

「ため息をつくほど、待たせたかな」。真由子は、ほおつと

GWが終わった翌日から、一気に初夏の陽気となった。半袖のワンピースに着替えながら、バーゲンまでの期間を数えてみた。その頃はきつと、ロンドンに滞在しているだろう。

GWの全日、隆之は子会社の視察のため、全国を飛び回っていた。真由子とはメールのやりとりだけ。真由子は「寂しい」と素直になれず、敢えてそつけないメールを返していた。隆之のメールの最後には必ず、「ロンドン行きの手帳を買ったか?」と、様子を伺う一文が入っていた。嫉妬を隠そうとしない隆之の子供っぽさに、真由子は苦笑した。

長年に渡るステディがいるのに、真由子にボーイフレンドがいるとわかっただけで、隆之は怒り狂った。真由子は困惑しながらも、隆之の愛情の証だと受け止めた。しかしロンドン行きは、博士号を取得したい真由子にとって、必要なことだった。秋には論文を提出しなければならぬ。そのためサマーバケーションを活用して、ロンドンで資料探しをしたい。リチャードのことより、論文が優先だ。だが、隆之は納得してくるだろうか。



にこやかな笑みを浮かべて

テーブル席につく隆之が、何だか憎らしい。隆之はそんな真由子の気持ちなど知らず、アペリテイフを注文した。葉草の香りがする甘い食前酒が口の中に優しく広がっていった。

「美味しいわ」と呟くと、隆之がにっこりと笑った。

「よかった。コース料理も気に入ると思うよ」

特定のステディがいる隆之に反発を覚えながら、それでもつきあっているのは、「真由子が喜ぶ顔が好きだ」と微笑した隆之に打たれたのだと思う。彼の素直な愛情表現も、真由子は気に入っていた。

大粒のコーンスープと大盛りの野菜サラダが続いて、メインディッシュが運ばれてきた。ピーフステーキのバイナッブル添え

だった。バイナッブルの上には、南国の紅い花びらが置かれ、そのゴージャスな盛りつけに思わず感嘆の声をあげた。肉は予想以上に柔らかで、ナイフで切ると、肉汁がじゅうつと流れた。スパイシーな味つけが絶品だった。

カルフォルニアにしては、上品な赤ワインも運ばれてくる。真由子は幸福感に包まれた。

ふと、隆之はバイナッブルを残して、ステーキだけ平らげているのに気づいた。

「どうしてバイナッブルを残すの? 嫌い?」

隆之は「いや」と苦笑しながら、「フルーツと一緒に肉を口に入れる気がしないんだよ」。

「男の人って、みんな同じなのかしら」

真由子はリチャードも同じ発言をしたことを思い出した。「フルーツと肉の組み合わせっ

で、日本語でいえば、「邪道」だよ。

真由子は無邪気に笑いながら、「リチャードもバイナッブル添えステーキが苦手だったわ」

「リチャードって、誰だい?」

ナイフとフォークを置いた隆之が、真由子を見つめると見つめた。にこやかな表情が消え、隆之から険悪なムードが漂ってくる。

「誰なんだ」

真由子は少し青ざめたが、正直に答えることにした。

「イギリス人のボーイフレンドだよ」

「つきあっているのか」

「まだそこまで?でもGWにロンドンに招かれているの?」

「行くのか」

「決めてない。……もしかして、嫉妬しているの?」

隆之は口を開きかけた。嫉妬を認めるなど、彼のプライドが許さないうのだから。

隆之はボーイに合図して、グラスにワインを注いでもらい、ゆつくりと飲んだ。

「嫉妬も素直な愛情表現なのね」

心の中で呟くと、隆之への慕いがゆつくりと広がっていった。

隆之が勧める奄美大島の焼酎に、ほろ酔い気分になった。口がほころびて、おしゃべりな女になっっていく。

「院生の先輩が、B級グルメ好きな男とつきあつてすぐに、別れたのよ。理由は最初から、ラーメン屋や、オヤジだらけのダイブな居酒屋に連れて行くからなの。自分の好みだけ押しつけてきて、先輩が行きたいっていうおしゃべりなカフェなんか、全く無視。別れて正解だつて、先輩が言っていた。自己中な男性と一緒にいるだけで疲れるつて」

「ふん。ところで、オレは、自己中か?」

「うん。どちらともいえない」

「ひどいな。では今度その先輩と三人で、表参道のカフェへ行くよ」

隆之の瞳が光った。真由子は白モツ焼きにレモンをぎゅうつと絞った。

久しぶりに研究室へ入ると、GWののんびりとした雰囲気も払拭するように、院生らが論文をめぐって熱く語っていた。負けてはられない。

その日の午後に、隆之から「クライアントの接待が先方の都合でなくなつた。久しぶりに、会おう。下町の粋なホルモン焼きで一杯つて、どうだい?」というメールが届いた。インターネットで調べると、「ダイブな豊の部屋で、生レバー刺しで女を口説ける」という口コミ情報に、思わず吹き出した。豊富なホルモンの数々もすっかり気に入った。OKでは久しぶりに待ち合わせをして行きましょう。二人は最寄り駅で待ち合わせることにした。

下町の夜に小雨がパラついてきた。駅の改札に隆之が現れる

と、きつと傘を差した。二人で一つの傘に入つて歩き出す。二週間ぶりの逢瀬なのに、まるで半年以上も会っていないかのように、他人行儀な素振りをしてみよう。会えない寂しさを隠したかった。

隆之の顎に、うつすらと無精髭が生えていた。「今朝、千歳空港からフライトしてそのまま出社だよ。ずーっと仕事をしていたんだ」

どうやらGW中は、ステディと過ごす暇もなかったようだ。真由子は、隆之をチェックしている自分に驚いた。しかも他の女性と幸せなひとときに酔いしれていなかったことを、心から喜んでいた。GW前は隆之と別れるつもりでいたのに、隆之のことになるといつものように自己矛盾だ

らけ。いつだって、思い込みばかりだ。真由子は別れという決断ができかねている。

曲がりくねつた道を歩きながら、古ぼけた一軒家にたどり着く。二階に昇ると、黄ばんだ畳の部屋に、テーブルが3つ置いてある。階段近くには木造の大きな筆筒があつて、まるで下町のお宅を訪問しているような錯覚を覚えた。

さつそく隆之が注文した。分厚いレバーや牛タン、さつぱりとした馬刺、さらに白モツ焼きに、酢みそで食べるコブクロ刺しなどが運ばれた。

「ニンニクまみれのサブライズね」

レバー刺しを口にしながら、真由子は隆之に微笑んだ。

レバー刺しには芋焼酎だよ、と

「嫌よ」

「どうして?」

「隆之とつき合っていること、知られたくないの」

隆之の眼差しに、影が揺れた。その時、携帯メールの着信を告げるメロディが流れた。リチャードからだつた。



箱根にある料亭温泉旅館を予約したのは、論文提出から3日後のことだった。

博士号の論文を提出してから、丸三日間、真由子は自宅で眠り続けた。やり遂げた達成感最高の気分をもたらしてくれたが、三ヶ月にも及ぶ執筆で疲労がたまった肉体を、ひたすら眠ることで癒した。隆之のことも、リチャードのことも何も考えなかった。だが月曜の朝に目覚めると、急に隆之に会いたくなつた。ロンドン行きの前に喧嘩をしたことが、まるで遠い過去のような気がする。隆之は真由子をまだ怒っているのだろうか。「怒っていますか」とメールしようとしたが、あまりにも子供っぽいので、止めた。まずは隆之の気持ちを逆撫でて、無視されてしまえばいい。

「では、いつも隆之がやってくれることを、今度は私がしてみよう」

隆之のように、素敵なディナーにふさわしいお店を探して予約する。しかもサブライズ付きで。さつそく「仲直りしたいから、箱根にある料亭温泉旅館で週末を過ごしましょう。私がセツ

表参道の花屋で見つけたウィンター・コスモスの美しさに、真由子ははつと息を呑んだ。

朝から降り始めた雪に照らされ、純白の花びらを縁どる淡いイエローの輪郭がきらきらと光っている。初めて隆之と出会った頃が、懐かしかった。「季節外れの花」と呼ばれているウィンター・コスモスは、隆之との恋を物語っていた。恋は、すでに思い出になっている。「隆之さんに贈ろう」

クリスマスカードを添えることも、忘れなかった。

明後日のクリスマスには、ロンドンへ出発する。新年をリチャードと過ごすためだった。もう二度と隆之に会うことはない。

紅葉の料亭温泉旅館で隆之に荒々しく抱かれてから、真由子は咬いた。「別れられないわ」

隆之は無言で頷いた。

「お座敷」と呼ばれる個室で、会席料理を堪能する時間が迫っていたが、二人共、不思議に食欲が湧いてこなかった。

「聞いていい？」  
と真由子は枕を両手でぎゅうつと握りしめ、乳房をシャツに埋め



「真由子、生きていたのか。僕はまだ切り替えができない。やっぱり、隆之は怒っている。しかも別れの気配も濃厚に漂っていた。真由子は隆之に対する執着心に気づいた。別れよう」と

「何だい」  
隆之は目を閉じたままだった。真由子は覚悟を決めた。「あなたと一緒に生きていきたいの」

「うん」  
鏡台の前に座ると、鏡に映る自



「うん」  
隆之のステディになりたいの。つまり？」

「うん」  
隆之のステディになりたいの。つまり？」

してもまた隆之へ戻ってしま

特定なステディがいる男と、安定した関係を期待しても無駄だとわかっていた。でも喧嘩するたびに、ますます隆之が愛おしくなる。隆之は真由子にとって、特別な存在となっていた。「でも、もう会えないのね」

がつくりと肩を落として、再びベッドに横になつた。今夜は眠れそうにもない。

隆之のことを思い出しながらうとうとしてみると、メールの着信音が深夜の部屋に響いた。

「来週の土曜午後5時に、君が予約した温泉旅館で」  
真由子は携帯を思わず胸に抱きしめた。

奥まった箱根の温泉旅館にも、紅葉の気配が忍び寄っていた。

染まりつつある樹木の光が旅館全体を覆い、その美しさに思わず目を細めてしまった。

5時きっかりに到着すると、すでに隆之が部屋でお茶を飲んで待っていた。

三ヶ月ぶりの隆之の表情に、やつれが見えた。

「お久しぶり」はあまりにも軽すぎるし、「元気でしたか」は、他人行儀のような気がした。真由子は言葉を探したが、見つからず、無言でお茶を入れようとした。

その時、隆之が真由子の右腕をつかみ、強引に引き寄せて、顔を近づけた。

隆之の汗の臭いが鼻梁を刺激し、真由子は思わず顔を背けたが、隆之はそれを許さなかった。真由子の両肩を抱き、唇を塞いだ。強く咬み続けられたせいで苦しくなったが、やがて快楽が押し寄せてきた。

隆之は真由子を押し倒し、そしてニットのワンピースを脱がせようとした。「どうして？」

と咬きながら、隆之の力を緩めようとしたが、抵抗しようとするますます強く押さえつけられた。

「ロンドンでイギリス男に抱かれたのか」

隆之の目が充血していた。嫉妬が、愛情の深さを物語ることだと心に刻み込まれる前に、真由子の白い裸体は、狂おしいほど隆之に求められていった。

らいかけて歩いた。

ウィンター・コスモスの美しさがまだ脳裏に焼き付いている。

明日のイブは、院生達が教授を囲んで、パーティの予定だった。

真由子は研究室に顔を出しただけで、すぐに帰宅した。旅行の準備がまだ終わっていなかった。

深夜に、また雪が降り始めた。やがて牡丹雪から粉雪になり、あたり一面を幻想の世界に変えた。

しんしんと積もる雪の音に混じって、男の足音が聞こえた。

そして強くチャイムが鳴った。甘い期待と、心の中で「まさか」とうち消す声が交錯する。

連続して数回鳴り続けたので、とうとう真由子は思いきつてドアを開けた。隆之が立っていた。

贈ったウィンター・コスモスを持つまま、両手で真由子を強く引き寄せた。コートにかかっていた粉雪がかり、隆之の息づかいが熱く伝わってくる。

隆之は、真由子を雪の中へ誘った。「どこへ行くの？」

隆之は無言で、真由子の手を強く握りしめ、駐車している車に向かった。二人の足跡が雪の中に浮かび上がった。